

# いわみざわの民話

## 第7回

「いわみざわの民話は、平成9年に「いわみざわの民話」刊行委員会が発行しました。

### 妻恋物語

大願の学校から約2百メートルばかり北にいったところに大願会館がある。その近くにいかにもその名にふさわしくない木橋がある。こんな貧弱な木橋に、なぜそのような名称があるのか不思議に思うことだろう。もつともこの妻恋橋というのは、この住民たちの間にだけ伝えられているロマンがあるのである。

この物語が発生したころの大願は、うっそうとした樹林におおわれていたのだが、それを伐採して開墾し、そこに麦やえん麦や芋などを植えて乏しい生活を始めたのである。移民の多くは福井県からのひとで、このロマンの中心人物もまたそうである。彼の名をスケジロウといった。当時の北海道への移民は、内地の食いつぶしや、一獲千金を夢みた山師根性のものであるが、開拓の志をいだい

て新天地を求めるものも少なくなかった。スケジロウもその1人で、親もとを出る時には、無理にも残して来た若い女房に、かならず暮らしようといこうにして直ぐにも迎えにくるからという、頼もしいことを置いてきたものだった。

ほとんど便りすらできないままに時を過ごし、くたくたにからだをさいなんで、時には絶望感の中で、ひたひたと崩れてしまう自分をあわれに思うこともあったが、そうした中にも、夕日だけは無性に美しかった。スケジロウは、その時ここにかげられてあった、当時はもつと貧弱な木橋に腰をおろして、最愛の妻をこのころから恋いしたったのだった。スケジロウはおいおいと泣いた。たとえどんなに大きな声で泣きわめいても、誰ひとりとがめだてするものもなかった。

オイー  
オハナー  
オハナー

その木魂はうっそうとした樹木が、たちまちぬぐいとなってしまい、後にはただただ死の静寂が残るだけだった。

誰もいないと思われた樹林に、しかし誰かが目撃していたのだろう。この話は誰から誰へということもなく、不思議に鮮明に伝えられていった。樹林の中の目や耳が、それらがこのうっそうたる大地のただひとつの命として、やはり生きていたのである。しかし一説には、そのころこの木橋に腰をかけていたのは、1匹の狸であったというひともある。

なにせ深い夜がくると、あやしげな鳥の羽ばたき、ふくろうの鳴き声、蒼白い月影、昼間は昼間で、あたかも降るような蝉時雨である。ともかく深い幻の中のできごとである。それにしても、木橋はいまもあのようなロマンを物語ろうとしているようである。

第8回は「瓢箪沼物語」を紹介します。

発行・編集 岩見沢市総務部市民活動課

ひとの動き 平成22年8月31日現在

●住民基本台帳 人 □ 総数 90,396人(前月比-61)  
男 42,484人(前月比-27)  
女 47,912人(前月比-34)  
-----  
世帯数 42,405世帯(前月比-9)

岩見沢市役所

☎068-8686 北海道岩見沢市鳩が丘1丁目1番1号  
☎0126-23-4111 ㊚0126-23-9977  
ホームページ <http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp>  
▶救急当番医ガイド ☎0126-23-5153  
▶消防テレホンガイド ☎0126-24-0119